

氏名（本籍）	高 松花（中華人民共和国）			
学位の種類	博士（学術）			
学位記番号	博甲第 7011 号			
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	中国長白山麓における井幹式民家集落の特徴と保全に関する研究 Characteristics of Log Cabin Houses in Traditional Villages in Changbai Mountain in China: Clarification of their Conservation			
主	査	筑波大学准教授	博士（農学）	黒田乃生
副	査	筑波大学名誉教授	工学博士	安藤邦廣
副	査	筑波大学教授	博士（工学）	藤川昌樹
副	査	筑波大学准教授	博士（農学）	伊藤弘
副	査	筑波大学助教	博士（建築学）	下田一太

論文の内容の要旨

（目的）

中国では 1970 年代末の改革開放以後、都市への人口流入や新農村建設によって伝統的な農村集落が減少している。一方、2003 年から歴史文化名鎮、歴史文化名村が選定され、伝統的な集落の再評価が進み保全の対象となっている。以上の背景から、本研究では長い歴史をもち、特徴的な構法の見られる井幹式民家とその集落を対象とし、民家および集落の特徴と変容を明らかにする。さらに、社会背景をふまえて変容の要因を考察し、保全の方向性を示すことを目的とする。

（対象と方法）

研究対象地は中国の井幹式民家の中でも冷涼な気候の長白山麓に位置し、調査当時にすべてが井幹式民家だった、漢族が生活する錦江村と主に朝鮮族が生活する下二道崗村とした。

研究方法は現地調査と資料調査による。現地調査では両集落の土地利用図を、民家については実測調査を行ない、あわせて住民、行政担当者への聞き取り調査、資料調査を行なった。

（結果）

集落の景観では、錦江村では森林が多く下二道崗村は草地が多い。政府の森林政策や農業に対する補助金によって景観に影響があることが明らかになった。

集落の配置では、いずれの集落も、木柵で囲まれた敷地内に主屋と付属小屋があり、敷地内の畑では野菜をつくっている。冬の食料が違うため、朝鮮族の下二道崗村には「ウム」があり、漢族の錦江村にはトウモロコシの貯蔵小屋がある。

民家の間取りは二つの集落ともに、社会の変化にしたがって変容した。漢族の錦江村では作業用倉庫が建設されたため台所が縮小し、「カン」の位置が南から北に変化した後、接客空間として「厅」が生まれた。下二道崗村では、ミダジによって分けられていた空間がひとつになった。

構法および生産技術では、錦江村の漢族は台所の通気性を確保すること、下二道崗村の朝鮮族は気密性が高いのが特徴である。漢族の錦江村で樽葺きが続いたのは木材の確保と加工が比較的容易で木材の再利用があるためと考えられる。朝鮮族の下二道崗村は木材が不足し、板のかわりに草が利用されたと考えられる。

錦江村は保護の対象となったため、現在でも井幹式構法で建築されているが、観光目的の新築が増加している。下二道崗村は補助金による煉瓦造の家屋新築によって伝統的な構法や民家そのものが消滅の危機にさらされているだけでなく、朝鮮族の移転などによって伝統的な建築構法の継承は困難な状況にある。ともに井幹式民家がある朝鮮族と漢族の集落では民族の違いや地方政府の維持管理や補助金の仕組みの違いによって現状が大きく異なる結果になった。

(考察)

生業の変化や社会背景の影響で漢族と朝鮮族のそれぞれの民家の間取りや構法に変化がみられた。しかし、共通点である井幹式の構造、また民族の特徴である漢民族のカンと朝鮮族のオンドルは変化していない。今後は生活や生業の変化にゆるやかに対応させながら、これらの特徴を保全する必要がある。30年で建替えてきた井幹式民家を保全するためには技術の継承はもちろんのこと、材料の確保など循環するシステム全体を保全する必要がある。

審査の結果の要旨

(批評)

経済成長とともに農村集落と古い様式の民家が急速に失われている中国において、井幹式民家に着目してその特徴を明らかにし、保全に向けた考察をのべた意義は大きい。また、詳細な現地調査をふまえて分析・考察する方法は今後の中国の民家・集落研究に資するものであると評価できる。

本研究のもうひとつの特徴は、長白山麓の井幹式の民家集落として漢民族と朝鮮族という二つの異なる民族が生活する集落を比較した点にある。環境や生業では二つの集落は共通点が多く、民族の違いよりはむしろ冷涼な気候、生業である朝鮮人参栽培の変化、政府の森林政策などが大きな影響を与えている。一方、民家と敷地を見ると、漢族の「カン」、朝鮮族の「オンドル」など民族の特徴が大きく、構法や変容過程も異なっている。今後、満族をはじめ中国全体の井幹式民家の研究へと発展させることが課題である。

平成 26 年 1 月 16 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ 学術 ）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。